

2016 年度日本語教育実習 最終レポート

私は三年間の集大成であるこのレポートを作成するにあたって、今まで提出してきた全ての日本語教育に関するレポートを読み返しました。すると自分のレポートではほぼ毎回ある一つのことについて触れていることに気が付いたのです。それは「声や発音」についてでした。模擬授業や、実際の授業での自分の「声」に関する反省点や改善点などが、私のレポートの中では数多く述べられていたのです。そこで私は最終レポートのテーマとして「自分の声の変容」を確かめていくことにしました。

まず初めに、私の理想とする教師の喋り方について言及します。私は4年前からずっと、学習者がゆったりと落ち着いたペースで授業を聴くことができるような声で授業をしたいと思ってきました。その方が、学習者がリラックスした状態で授業に臨むことができるし、授業効率もよくなると考えているからです。それには自分が喋るスピードに気を付けること、滑舌よく喋ること、そして少し低めの声で落ち着いた喋ることが必要です。しかし、頭ではわかっているにもかかわらず実際にやってみると中々うまくいきません。大学に入るまで、人前で大きな声で喋ることもあまりなかったし、自分の声を意識しつつ喋ったことがなかったからです。「声」は教師にとって専売特許ともいえる大切なものです。ですから、その声をどのようにして手に入れていくかが、私の4年間の日本語教育学習の課題の一つとなっていました。

実際に私が一年生の頃に書いたレポートの「声」に関する記述を見ていきます。記憶が薄れている部分もありましたが、主に初めての JICA の人たちとの日本語セッションや、授業内での簡単な模擬授業についての文言の中で、声について書かれていました。その中でも改めて私の目を引いたのが以下の一文でした。

『私の順番が終わりフィードバックをもらっているときに友人から「あなたの声は他の人と比べると細い気がする。」という指摘を受けたのです。』

これは自身の日本語教育学方法論Ⅱのレポートからの抜粋です。確かに当時の DVD を見直してみると、そこには自信もなく、緊張で少し声の上ずった私が映っていました。この友人からの一言は当時の私にかなり大きな衝撃を与え、そして私は、授業を行うとき時の発声について深く考えるようになりました。とにかく経験の浅い当時の私にできたことは、練習を重ね、口を大きく開けて発音することや、通常自分が話す声音よりも低く落ち着いた聞こえる声を出すことくらいで、それ以外にはありませんでした。また、練習を積み重ねることで地声から先生らしい太く大きな声へステップアップすることを試みましたが、そう簡単にはいきませんでした。これが一年生時代です。

続いて二年生の頃のレポートを見ていくと、今度は日本語の発音の仕方で苦労していま

した。大きな声で発声することに慣れていないため、変に助詞を強調して発音してしまったり、上げなくてもいい語尾を上げて発音してしまったりするのです。自分が授業をしている最中は一生懸命で気づかないのですが、後から DVD で見てみると、明らかに発音がおかしい部分を見つけることが多々ありました。模擬授業の回を重ねるにつれ、ある程度は自分で気づき、改善できるようになったのですが、実際に三年生になって日本語教育実習として授業を行うときも、たびたび助詞を強調する癖が抜けていませんでした。ですから、プロミネンスは未だに私の課題だと言えます。

最後に三年生で行ったウィンチェスターの学生への授業と、YMCA での実習について記述します。ウィンチェスターの授業からは今までとは打って変わって、全体的に少しずつ褒められることが多くなっていきました。それは私の課題であった「声」についても同じです。具体的には主に 2 つの点で成長したと思います。一つ目は声のピッチです。DVD を観てみると、今までの模擬授業に比べて、ウィンチェスターの授業の頃から自分の声が少し低くなっていることに気が付きました。二年間の練習の成果に加えて、実際に生徒を目の前に授業をすることで、「先生らしくしなければならない」という気持ちが無意識的に働いたことも原因なのではないかと思います。そのおかげで、この頃の授業からだんだんと自分が先生らしくなっているという変化も見えました。また、同じ頃から私は自分の授業中、内心とても緊張しているにも関わらず、授業後のフィードバックで「落ち着いて見える」といわれるようになっていきました。普段の自分の声よりもピッチの低い声を出すことで、学習者が安心して授業を受けることができるようになり、また自分自身も落ち着いた先生らしく見えるのだと、この実習で学びました。そして二つ目は声の大きさです。YMCA での授業で私は、今までとは比べ物にならないほどの大きな声で、授業ができるようになりました。実際に授業後のフィードバックで「声に圧があり、生徒にリピートして言ってもらいたいという私の意思が声を通して伝わってくる。」と言われたほどです。今までにない大きな教室で、経験したことのない大人数への授業は、自分にとって大きなプレッシャーでした。しかしながら、そのような環境の中でも、自分の経験してきたこと、そして理想に近づこうとする心を意識することで、昔の自分の声が嘘のように感じるほど、先生らしい大きな声で授業をすることができたのではないかと思います。この二つの成長にどちらも共通して言えることは、今まで二年間積み上げてきた実績が、私に少し自信を持たせてくれたということです。

一年生の頃の「細くて聞き取りづらい声」は、三年間私がたくさんの経験や練習を積んだおかげで、大きくて時には生徒にいい意味での威圧感を与えるほどの「先生らしい声」に成長しました。この「声」が三年間で私が体験した多くの変容のなかの一つです。この経験から私は、「どんなに困難だと思うことでも、まずトライしてみる事が重要だ」と改めて感じるようになりました。初めは「声なんて生まれつきのもので、変えられるはずはない」と不貞腐れていた私が、生徒のため、自分の成長のために少しずつステップアップしていくことで、今では自分の理想とする教師の声に少し近づくことができたからです。これから社会人になり、どんな職業に就くにしても、必ず困難な壁にぶつかるだろうと思います。それで

も初めから出来ない決めつけるのではなく、まず挑戦してみる。一つずつ課題を吟味し、解決策を考え、実践していくこと。そして、これらのプロセスを忘れずに実行していくことが、自分自身の成長につながっているのだと私はこの日本語教員養成課程を通して改めて実感しました。そしてこの経験を通して、そういった「自己研修型人間」になりたいと強く思うようになりました。

三年間のレポートを見返し、今私は「塵も積もれば山となる」ということわざをしみじみと感じています。初めはちょっと興味があるな、で始めたなんの知識もない金髪の18歳が、今では様々な経験を経て、不完全なりにも外国の方たちに日本語を教えることができているからです。確かにこれまでいろいろな困難や苦労もありましたが、それを自分で考え、乗り越えることで、たくさんの成長を実感することができました。この日本語教員養成課程は私の学生時代を語るうえで、無くてはならない存在です。三年間頑張ってきて本当に良かったと心から感じています。ありがとうございました。